



2012
秀作

第10回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール

いま、もう一度ふるさとをみつめる

大分県・大分県立日田高等学校 2年 平川 みのり

私のふるすとは、人口約1,700人の小さなまち。昔からある理髪店や酒屋さんを除いては、目立ったお店はない。それでも私は、ここ大鶴おおつるが大好きだ。きれいな緑の山々があり、真ん中には清らかに大肥川おおひがわが流れている。あいさつをすればいつも暖かく迎えてくれるじいちゃん、ばあちゃんが育てている大切な畑や田んぼに囲まれてゆっくりと走る汽車。大鶴のシンボル畦倉山あぜくらやまは今日も私たちを見守ってくれている。私たちはこの自然に囲まれて大きくなった。どんなに辛いことがあっても、大鶴に帰ってくれば、山が、川が、そして大鶴の空気が忘れさせてくれる。私にとって、明日への元気をくれる大きな大きな存在だ。しかし、あと2年もしたら進学しここからしばらく離れなければならない。また7月には、大鶴を2回も豪雨が襲った。いま、もう一度ふるさとをみつめたい。私たちにできることが、きっとあるはずだ。

かつて大鶴は、炭鉱と農業と林業のまちと言われていた。中でも炭鉱は、宝珠山ほうしゅやま炭鉱の一つの事業所が置かれていたこともあり大変賑わっていた。私の祖母もそこで事務をしていたという。昔の大鶴には傘屋に自転車屋、銀行や大鶴劇場という映画館のような場所もあり、炭鉱で働いた人々が一日の疲れを癒しに見に来ていたらしい。農業では、中心は稲作であったが、裏作で麦、菜種も作っていたそうだ。田植えや収穫の時期には、学校が休みをくれたこともあったという話も聞いた。また、大鶴には製材所ひたがたくさんあり、終戦以来復興のために空襲の被害のなかった日田の木がよく売れるようになった。また、炭鉱の現場では松の木が使われており、林業も賑わっていた。

しかし、時代は変わっていった。石炭に代わり、新しいエネルギーとして石油が用いられるようになると、炭鉱業も衰退し昭和39年には宝珠山炭鉱が閉山してしまった。手のかかる田んぼの世話をする人は減り、働きに出る人が増え、農業も衰退。かつては需要のあった木材も、鉄筋にかわり売れなくなって





しまった。さらに、昭和30年、大鶴村は昭和の大合併で日田市に併合されることとなる。村のお金は市のお金となり、村に直接お金が入ることもなくなった大鶴は、衰退の一途をたどるばかりであった。車社会になり、買い物は日田に出て行くばかりで一気に村に元気がなくなっていった。このまま農協までも併合させられたら大鶴は消えてしまう……。大鶴の人々は嘆いていた。

そんな崖っぷちの大鶴に救世主があらわれた。^{いけながちとせ}池永千年さんだ。^{おおやままち}有名な大山町の町おこし、「梅栗植えてハワイへ行こう」運動にも関わった人物である。「すきくわ捨ててはさみ一本の農業」。池永さんはこう題して大鶴で活動を進めていった。高齢者、婦人を対象に軽労働で働きがいのある農業をめざす池永さんに、最初は農家がとりあわなかったが、その成果を実証してみせ、チンゲンサイなどの栽培が盛んに行われはじめた。大鶴にも農業ハウスが見られるようになり、ターサイやツルムラサキ、エンダイブなどを少量多品目生産で育てた。途絶えかけていた大鶴の農業が少し息を吹き返したのはいうまでもない。はじめは10人だった参加者が、240戸が一戸一品運動に参加するまでに大きくなり、この活動が地域の柱となった。

その成果は現在にも続いている。大鶴のばあちゃんたちがよく利用する「やさい工房^{さいら}沙羅」をのぞいてみると、じゃがいも、にんじんなどの野菜やその種、苗はもちろん、大鶴のツルムラサキやエンダイブもあった。また、地元で味噌をつくっている「ももは工房」の大豆や小麦粉、大鶴のお米などふるさとで作られた物も多く並んでいた。値段も100円などと手頃な価格で、主婦やばあちゃん、おじちゃんまで世代を越えた人々が店内を歩きまわって買い物をしていた。

沙羅の店長さんに話を伺ったところ、一日に平均60人から70人のお客が来て1人がおよそ800円分の商品を買っていくという。お盆前には一日に130人ものお客が訪れ賑わっていた。店内には約400の商品がおいてあり、中でも主な野菜でいうとその9割が大鶴で作られたものだそうだ。店員さんの話では、大鶴のお米は美味^{おい}しいという人気で他の地方に送る人もいるらしい。ふるさとで手間暇かけて作られた作物が日本各地で楽しんでもらえるのは嬉しいことだと感じた。

大鶴のおじちゃん、おばちゃんなどたくさんの方が野菜を仕入れたり買い物





をしたり、そこで話をして楽しんだり、そこにいる誰もがいきいきとしている沙羅。そんな沙羅にも危機があった。もともと農協が経営していた沙羅であったが、だんだんと採算が合わなくなり農協が撤退してしまったのだ。このままでは作った作物を出す場がなくなり、大鶴人の憩いの場もなくなってしまう。

そんなところを助けたのが大鶴まちづくり協議会だった。

「ゆめと森林大鶴の郷づくり」をテーマに農林水産省のふるさと地域力発掘支援モデル事業^注の助成金を利用してまちづくりを行っているこの会。この事業は5年計画で進められ、最初の年には200万円の補助が、また1年に200万円ずつ補助が出る。そのうちの200万円を沙羅に寄付してまずは存続を維持することができることになった。さらに、毎年約100万円を運営資金として補助金から出資し、地域の人が自分の作った野菜を簡単に出せる場所を提供している。現在沙羅はおおつるの小さな道の駅としての実証実験というかたちで、大鶴まちづくり協議会のもとで運営されている。

そんな沙羅の店頭に並ぶ商品で、一際目立つ空の箱があった。大鶴の女性グループ「ハナミズキの会」のみなさんが作ったお弁当が入っていた箱だった。1日におよそ10個しか出荷していない手作りのお弁当はとても人気ですぐ売れてしまっていた。

ハナミズキの会を立ち上げ、大鶴まちづくり協議会の事務局長を務めていた経験のある本河^{ほんかわ}さんに話を伺った。ある日、本河さんは日田市の農産物流通対策室から農産物加工等推進緊急対策事業補助金が出ており、2人以上の女性グループに助成金が出ることを知った。3分の2の補助率で、加工所設備改修代、機材購入代、保冷車両購入代などの補助をしてくれるものだった。本河さんは自宅の下に「ハナミズキの会」の調理室や応接室などを作り、奥さんと2人でパンやおもちを作ることにした。コンロや水道、おもちをこねる機械やパンを焼く機械などのほとんどが安く譲り受けたり、使われていない物を買取ったものだったが、それでも設備はしっかりしていた。

試験的にパンやおもちを作っていた時、福岡からある依頼があった。先生と生徒のお弁当を作ってほしいというものだった。それまでお弁当の販売はやっていなかった本河さん夫婦は戸惑ったが、せっかく来た依頼だからと引き受けることにした。その結果は大好評であった。この話を聞いた沙羅が、ちょうど店に





出してもらっていたお弁当屋さんが休んでおり、お弁当を売ってほしいという要望もあったことから「ハナミズキの会」に依頼をし、現在に至る。

本河さん夫婦が手作りした愛情たっぷりのお弁当。昨年1年で5,000個の売り上げがあったほど大人気だ。前日から下準備をし、朝3時ごろから仕込みに入るという生活が毎日続く。暑い季節は食中毒の心配もあり、作るのにも気を遣うと話していたが、忙しいながらも注文を受け、2人で仲良く作っている様子はとても幸せそうにみえた。

本河さんはこれからの大鶴のまちづくりをどうするかが課題だと言っていた。いままでは補助金のおかげでなんとか進められていたが、来年度から大鶴まちづくり協議会、そして沙羅も独り立ちしなければならない。大鶴に役場があれば、お金も回ってくるだろうがそれもない。市役所に頼らず、若い人たちがどのように動くかが大切だと、私たちに期待を込めて話してくれた。

まだ高校生の私にとって、事業を始めるなんてことは不可能だと思う。しかし、高校生だからこそその影響力はあると信じたい。今回沙羅やハナミズキの会を訪ねたとき、普段は高校生の立ち入らない場所であるために私が来ることが珍しく、たくさん話を聞かせて頂くことができた。知らなかった大鶴の魅力、これからの課題に出会って、私も退職したら大鶴に戻ってきて、ふるさとの活性化の手助けをしたいと強く思うようになった。いつの日にか、大鶴の道の駅を作り直売所、レストランもある施設を作り観光地にしてみせたい。そのためにもまずは自分から地域の行事に積極的に参加し、まちづくりの現状を主体的に知ろうとする姿勢が大事だと思う。いま、日本は少子高齢化社会で若い人々のエネルギーが足りないように感じる。小さな町からいまこそ立ち上がって、ふるさとを愛する気持ちを武器に自ら切り拓く人に、私はなりたい。

注) 農山漁村(ふるさと)地域力発掘支援モデル事業は平成21年度で廃止、その後は日田市が大鶴地区ツーリズム拠点整備事業として引き継いだ。

<参考文献>

- ・株式会社よかネット「合併で消えかかった村が、全国ブランドとして生き返った」『よかネット』No.53、2001年9月
URL <http://www.yokanet.com/4.yokahitonet/pdf/yokahito2/yokahito2-3-114.pdf>

